対談 守破創

サッカーは世界の縮図 グローバル化が景色を変える

日本サッカー協会（JFA）会長で、国際サッカー連盟（FIFA）のカウンシルメンバーも務める田嶋幸三氏。2022年に開催されたワールドカップ（W杯）カタール大会での日本代表チームの躍進や開幕30周年を迎えたJリーグ発展の背景には、どのようなリーダーシップがあったのか。国際基準で考えることの必要性を、少年時代からサッカーを続けている高田創審議委員と語り合う。

高田 創

日本銀行政策委員会審議委員

TAKATA Hajime

1958年神奈川県生まれ。82年東京大学経済学部卒業、同年、(株)日本興業銀行入行。86年オックスフォード大学開発経済学修士課程修了。99年興銀証券(株)市場営業グループ投資戦略部長、2000年みずほ証券(株)市場営業グループ投資戦略部長、11年みずほ証券(株)執行役員グローバル・リサーチ本部副本部長。みずほ総合研究所(株)常務執行役員、専務執行役員、副理事長エグゼクティブエコノミストを経て、20年岡三証券(株)グローバル・リサーチ・センター理事長エグゼクティブエコノミストに就任。著書に『地銀　構造不況からの脱出―「脱銀行」への道筋』(きんざい)、『個人金融資産2000兆円　山は動くか』(同)、『シナリオ分析―異次元緩和脱出：出口戦略のシミュレーション』(日本経済新聞出版社)など多数。22年7月より日本銀行政策委員会審議委員。

田嶋 幸三

日本サッカー協会（JFA）会長

TASHIMA Kouzou

1957年熊本県生まれ。76年埼玉県浦和市立南高校サッカー部でキャプテンを務め、全国高等学校サッカー選手権で優勝。筑波大学に進学し、日本代表選手に選ばれる。卒業後、古河電気工業(株)に入社、83年から86年まで西ドイツのケルンスポーツ大学に留学。筑波大学大学院修士課程体育研究科修了。筑波大学と立教大学のサッカー部コーチ、筑波大学客員助教授などを経て2001年U-17日本代表監督として世界大会出場。ＪＦＡ技術委員会委員長、ＪＦＡアカデミー福島初代スクールマスターなど歴任。15年から国際サッカー連盟(FIFA)の理事（現・カウンシルメンバー）を務め、現在3期目。16年から現職。19年から21年まで日本オリンピック委員会副会長。著書に『「言語技術」が日本のサッカーを変える』(光文社新書)、『日本サッカー協会会長秘録　批判覚悟のリーダーシップ』(中央公論新社)がある。

写真 野瀬勝一

ドイツ留学時の子どもへの指導で言語技術の必要性を痛感した

高田　田嶋さんには父・勇（注1）ともども長年お世話になっておりまして、今日は対談の機会をいただき、大変光栄に思っています。

田嶋さんは私より一歳上で、小学生の頃からサッカーをなさり、全国高校サッカー選手権では優勝されました。さらに大学時代、日本代表と輝かしい活躍をされましたが、まずはサッカーを始めたきっかけを教えてください。

田嶋　一つは、小学一年生のときの東京オリンピック（五輪）です。サッカーが行われた駒沢運動公園に家が近かったので、見に行きました。

それと、ちょうどその頃、学習指導要領でサッカーが体育の授業の必修科目に指定されました。

そのようなわけで、小学校でサッカーに出合い、五輪で競技としてのサッカーを見ることができ、四年後にはメキシコ五輪での銅メダルに興奮し、小学校で良い指導者に巡り合う――そんなことが重なって、サッカーに夢中になりました。それがずっと今まで続いています。

高田　私も六八年のメキシコ五輪には鮮烈な思いを持っていて、実はその頃にサッカーを始めています。スポーツ少年団という子どもが授業外の時間に集まってスポーツを行う場が急にできまして、何人か集まるとボールをくれたんです。

当時は釜本邦茂さん（注2）や杉山隆一さん（注3）という素晴らしい選手がいらして、日本サッカーリーグも始まった頃でした。メキシコ五輪後にヤンマーディーゼル対三菱重工戦が国立競技場であって見に行ったのですが、観客が四万人以上も入っていましたね。

田嶋　あれだけ盛り上がったのがしぼんでしまったということが、ＪＦＡ会長に就いている今の私にとって教訓になっています。私はその後のお客さんが来ない時期に日本代表として古河電気工業（古河電工）でもプレーしたので、「あの時代にだけは絶対戻りたくない」という思いで今の職務に当たっています。

高田　古河電気工業でプレーされた後、指導者の道をお選びになり、当時の西ドイツにも留学されていますね。

田嶋　少し経緯があります。高校生の頃にさかのぼりますが、当時は高校サッカーが非常に盛んだったのです。私もサッカーの強豪校に行きたいと思い、越境して、浦和南高校に進学しました。そこは、梶原一騎さん原作のサッカー漫画「赤き血のイレブン」のモデルになった高校でもありました。

一方で、竜雷太さんが教師役で主演した学園ドラマ「これが青春だ」などにも影響されて、体育教師になりたいという夢がありました。当時はプロリーグはありませんでしたからね。それで卒業後は筑波大学に進み、高校の教員になろうと思っていました。ところが、大学四年生のときに日本代表に選ばれ、幾つかの実業団チームから声をかけていただいたので、「もう少しやろうかな」と。

古河電工を選んだのは、そこ

（注1）高田勇（一九三一～二〇一二）／フランス文学者。明治大学名誉教授。フランス語教育に関する著書のほか、ロンサールやノストラダムスを中心とした訳書など多数。サッカーを縁に田嶋幸三氏と交流があった。

（注2）釜本邦茂（一九四四～）／元サッカー選手（ヤンマーディーゼルサッカー部所属）、元サッカー指導者。日本サッカーリーグでは歴代一位となる通算得点（二〇二点）とアシスト（七九回）を記録。一九六八年メキシコ五輪で得点王。参議院議員を一期務めた。

（注3）杉山隆一（一九四一～）／元サッカー選手（三菱重工業サッカー部所属）、元サッカー指導者。メキシコ五輪で五アシストするなど日本代表でも活躍した。

からドイツの1.FCケルンに行った奥寺康彦さん（注4）の存在があったからです。「西ドイツに二カ月留学させてあげる」と言われて、興味を持ちました。

高田　すぐに行かせてもらえたのでしょうか。

田嶋　ええ。そこで見た環境には驚かされました。森の中に天然芝のグラウンドが数面あって、クラブハウスはきれいで、その中で科学的な指導を受けて、練習後にはシャワーを浴びて着替えて帰れる。スポーツにこんな爽やかな世界があるのか、とびっくりしました。

　後で知ったのですが、西ドイツは戦後のスポーツ政策をしっかりやり、都市ごとの人口に応じてスポーツ施設の充実化をすすめているとのことでした。

高田　行政の財政支援も伴っているということですね。

田嶋　留学しているときはケルンスポーツ大学の学生寮で生活させていただき、そこから通っていたのですが、すぐに「もっとここ（ドイツ）で勉強したい」という気持ちになりました。

　そんな経験もあって、古河電工での選手生活を経た後、改めて筑波大学大学院に進むことを決断し、合格後にすぐ、ドイツへと再び留学したんです。

高田　日本人では初ですか。

田嶋　すでに二〇人ぐらいサッカーを勉強しに来ていましたね。その中で私は、日本のサッカー界に多大な影響をもたらしたデットマール・クラマーさん（注5）が監督を務めていたバイエル・レバークーゼンに受け入れていただき、プロの練習を毎日見ながら、アマチュアチームでプレーするという生活を一年半くらい続けました。

高田　クラマーさんといえば日本のサッカーの礎を作った方ですが、離日後も日本のサポートをしてくださっていたんですか。

田嶋　そうです。長沼健さん（注6）、岡野俊一郎さん（注7）たちとのパイプが非常に強かったのです。レバークーゼンは私が留学したケルンから近かったので、非常にラッキーでした。

　ですが、私は教員になりたいという目標を捨てきれなかったものですから、ドイツでは指導者になろうと思って二年半ほど学びました。

高田　当時の日本のスポーツ指導は「根性」という感じでしたから、田嶋さんが新しい時代の科学的な指導法を持ち込まれたということでしょうね。中でも、言語技術を大事にされていると聞いています。

田嶋　私はケルンのクラブで一二歳以下の子どもの指導をさせてもらったのですが、今ここに来るまで、その体験が大きく影響しています。

　ドイツには、日本のような上下関係という感覚がありません。皆対等で、子どもですら平然と、指導者である私に「なんでこの練習をするの？」などと聞いてきます。そういう環境のなかで、指導者というのは言葉でしっかり意図を伝え、さらに納得させなければいけないのだな、と学びました。

　プレー中も彼らはとても考えています。「なぜそこに蹴ったの？」と聞くと、必ず彼らなり

（注4）奥寺康彦（一九五二～）／元サッカー選手。現在、一般社団法人横浜FCスポーツクラブ代表理事。古河電気工業サッカー部を経て、西ドイツの1.FCケルン、ヘルタ・ベルリン、ヴェルダー・ブレーメンでプレーし、ブンデスリーガ優勝などの戦績を残した。

（注5）デットマール・クラマー（一九二五～二〇一五）／ドイツ生まれ、元サッカー選手、元サッカー指導者。日本サッカー界初の外国人コーチで「日本サッカーの父」とも称される。

（注6）長沼健（一九三〇～二〇〇八）／元サッカー選手（古河電気工業サッカー部所属）。日本代表監督を務め、メキシコ五輪で銅メダルを獲得。日本サッカー協会会長も務め、日韓W杯招致にも尽力した。

（注7）岡野俊一郎（一九三一～二〇一七）／日本代表監督、日本サッカー協会会長、国際オリンピック委員会委員など歴任。日本代表チームではクラマー氏の通訳も務めた。

の論理で答えてくるのです。常に論理的に考えながらプレーしているから的確に判断できる選手になるわけで、そういうことを日本の指導者たちに伝えたいと思うようになりました。

国際的に活躍するには「察してくれ」では通じない

高田　帰国後は筑波大学、立教大学で指導をされています。そこで実績を上げて、アンダー世代の代表監督になったということでしょうか。

田嶋　アンダー世代の代表監督になる前に、Jリーグで指導者養成を担当した時期があります。

　リーグ発足から二年目ですが、このとき、日本人監督が次々と退任していく事態に直面しました。それで、どうして辞めることになったのかをインタビューして回ったことがあります。その時、多くの監督が口にしたのが、「なぜこの選手を代えたのか」「なぜこの練習をするのか」というジーコなど多くの外国人選手からの質問に答えられず、プレッシャーに耐えられなくなった……というものでした。

高田　やはりコミュニケーション力が重要ということですね。

田嶋　はい。それで、プロチームやプロ選手を指導できるS級ライセンスの取得課程に、ディベートや言語技術習得を取り入れました。

　そうするうちに、自分も現場でやりたくなり、U-17の日本代表監督をさせてもらったんです。

高田　論理的に伝えていく表現力や指導法というのは、勉強で身につけられるものなのでしょうか。

田嶋　言語技術を身につけるには、四六時中論理的に考えることが求められますよね。その点、日本語は不向きかもしれません。省略しても通じますから。

　しかし、「察してくれよ」では国際的には通用しません。プレーにおいても、「ここにボールをくれよ」と言うだけではだめで、「俺は足が速いからここにパスしてくれれば絶対活躍できるよ」とちゃんと伝えることが大事になってきます。

高田　海外では日本と比べて言葉や民族など多様性が大きく、ちゃんと説明するカルチャーがありますね。確かに日本に欠けている部分かもしれません。一方で最近は、海外で活躍する選手が増えています。

田嶋　ヨーロッパで百数十人、ASEANに一〇〇人以上、インドなどでプレーしている選手もいます。そこで活躍するにはその文化に慣れ、言葉もできなければいけませんが、最近はインタビューでも自分の言葉で話している選手が多く、非常に成熟してきているなと感じます。

高田　二〇二二年のカタールW杯を見ていても、日本代表のメンバーのグローバル化を感じました。私はサッカーは世界の縮図だと思っているのですが、人材のグローバル化というのは、これからの日本が目指すべき姿だと思いました。日本代表は日本のグローバル化のモデルケースでもあると思います。

Jリーグ開幕三〇年の節目に思う道のりの正しさとこれから

高田　ところで、二〇二三年五月十五日はJリーグ開幕から三〇周年という大きな節目でした。数々の成果がありますね。

田嶋　Jリーグは一九九一年に地域に密着することと、代表チームが世界で強くなることを目標に掲げて発足しました。発足から二年後にリーグが開幕して三〇年。ただプロリーグをやってW杯に出られたわけではありません。地域にサッカーが浸透して広い裾野を作り、そこから優秀な選手を送り出して世界で勝てるようになることをずっと目指してきたのです。

高田　世界を見回しても、三〇年でこんなに大きなブレークスルーがあった地域や国はないように思います。今後は、さらに一段階上に向かうという感じでしょうか。

田嶋　JFAがミッションステートメントとして出した「JFA二〇〇五年宣言」では、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」という理念を具現化するために、「日本代表が世界で活躍することで、人々に勇気と希望と感動を与える」というビジョンを示しています。実際、カタールW杯でドイツ、スペインという強豪国を破りベスト一六に進んだとき、日本中が熱狂しました。

　実は二〇五〇年までにW杯で優勝するという約束もしていて、これにはメディアなどから疑問の目が向けられていたのですが、最近は「もっと早めたほうが良いのではないか」とまで言われるようになっています。

高田　目線が高くなったのですね。選手たちが普段から世界基準でやっていることもあり、良い循環ができたということですね。

　私も今、中央銀行の立場として、常に世界の動向を意識しています。金融の動きは世界中が一体になっていますから。そういう点で、共通するものを感じます。

田嶋　常に世界を意識するという意味では、確かにサッカー界では全国津々浦々まで「この子は世界で活躍できるんじゃないか」という視点で指導者は考えてくれています。

高田　やはり、W杯カタール大会で新しい景色が見えたのだと思います。

田嶋　本当にそう思います。日本が最初に出た一九九八年のW杯フランス大会を思い出します。高田さんのお父さまと現地で決勝戦を見て、ホテルに帰ってシャンパンを飲み、外に出たら、パリ中に人があふれていました。懐かしいです。

　あのときのパリのように、あんなふうに日本を熱狂させたいと思います。日本中の人が「W杯に勝った！」と街に繰り出す時が来たら嬉しいですね。

高田　一人のサッカーファンとして期待したいです。と同時に、今後はさらにプレーする人が増えるといいなと思います。実は私もフットサルを月に一度くらい楽しんでいるのですが、昨今はスポーツの習慣化の大切さも叫ばれていますね。

田嶋　JFAの中期計画では、キッズ、女子、シニアのスポーツ促進を重点的に取り組んでいくことを掲げています。例えば、生涯スポーツの一つとして、ウォーキングサッカーを推奨しています。また、未就学児に向けては「目指せクラッキ！」というプログラムをクリアし、各地で行われる対象イベントに参加したキッズにサッカーボールなどが入ったスターターキットをプレゼントしています。

　ほかにも、フットサルやビーチサッカー、障がいのある方々のサッカー団体のサポートなどにも力を入れているところです。

高田　サッカーにはさまざまな人をつなげる力があることを改めて感じます。今日は本当に楽しかったです。ありがとうございました。